

Report

身近な自然の観察・記録活動 石神井川緑道版

2020.9.10

一人ひとりの自主活動 だれでも参加できます

活動：月2回(第二木曜日・第四金曜日)10:00より(雨天中止)

コース：帝京大学付属病院北詰・御成橋たもと→金沢橋

問合せ・連絡先：090-8646-9757 木村松夫 com-matchan@hotmail.co.jp

花のない季節一乾燥なのか草刈りなのか



川面で遊ぶカルガモのカップル3組。子育てはもう終わって巣立ちをしたのかしら?

例年9月の前半は開花している植物が少ない時期になります。夏は終わったのに、秋たけなわというにはまだ早すぎるという、季節の端境期(はざかいき)なのでしょう。それにしても9/10の観察・記録活動では開花している植物は1エリア内に10種あるかないか、ものすごく少ない石神井川緑道。

ほとんど毎日が雨だった7月に続く8月はほとんど炎天の猛暑日が続いたために、植物の生育状況が変わってしまったのか、はたまた自然の状況とは関係なく行われる「手入れ」がまちなかの野草の植物相を貧弱なものにしてしまったのか、軽率には断定

できないのですが、まちなかの自然が変容しつつあるのには、もっと注意深く目を向けていかなければなりません。

右の2枚の写真のうち、左は炎天が続いて露地が乾燥して草が生えなくなっている状態。一方、右は草が生えています。しかし、背丈は低く花も付けていません。草刈りが行われた後の再展葉なのかも?



民有地の「再開発」進行中

最近の石神井川緑道ではフェンスの向こう側の民地の「開発」が目立ちます。これまで、草木が植えられていた庭がなくなったり、草地であったところが整地されています。少しでも草が生えていると花は咲くものです。写真はマルバルコウソウとヨウシュヤマゴボウでいずれも貴重な種ではありませんが、あればそれだけ目を楽しませてくれるものです。民地のみどりは景観を構成する重要な要素なのです。

それでも自然の摂理は生きている



去年まではアパートの敷地内に大きな木が茂っていたのですが、おそらく日照を確保するためでしょう、それがきれいに伐採されました。明るくなったフェンス際には実生のアカメガシワが生えてきました（左の写真の赤い円内）。この植物、暗くなった林の樹木を除伐して明るい環境がつくられると真っ先に生えてくる樹木、つまり開拓者＝パイオニア植物として知られています。都会のど真ん中のここでも、ちゃんと自然の摂理は生きているのだから、そういうことを考えた「開発」と自然との共存が求められているのでしょうかが、まずは、変化をしっかりと受け止めること。右はそこに生えてきた背丈が異様に伸びたツユクサとエノコログサ。

8/28レポートのF1種スペリヒュの続報 開花を観察



←スペリヒュ 8/10の出かけ際、我が家のある玄関先のフェンスに吊るしたプランタで咲きました。何年も前にポーチェラカを買ってきて植えて、その後は花を付けないスペリヒュに「変身」していたのですが、毎年観察し続けていて花を見たのは今年が初めてです。スペリヒュは日がよく当たる時間帯に開花するので見つけにくかったかもしれません。左下の石神井川緑道のも、よく見ると結実しています。

図鑑によるとスペリヒュは1年草。だから「花が咲かない」と思い込んでいたのは間違いで、実際には毎年開花・結実・発芽を繰り返してきたのでしょう。しかし、でも、でも、でも・・・、園芸種として開発されたポーチェラカはwebでは多年草と説明されています。ということは、遺伝子操作でつくられたF1種のポーチェラカが2年目以降多年草の性質に変わったスペリヒュに「先祖返り」したと言えなくはないです。

これはあくまで仮説。こういうことは、同じ場所で同じ対象を何年も続けて観察してわかることなのです。

野草を敵だとばかりに徹底して剥ぎ取ってしまう区役所の草刈り、何とかならないものかしら？



次回石神井川緑道観察は9/25、10:00 御成橋スタート